



# Intangible Cultural Heritage

日本における  
無形の文化遺産の保護制度



# Intangible Cultural Heritage

A woman in traditional black and red attire is captured in a dynamic pose, possibly performing a dance or ritual. She is wearing a black headscarf with a red floral ornament and a black long-sleeved top. Her right arm is extended forward, and her left arm is bent. The background is a blurred outdoor setting with green foliage and a light-colored wall. The overall mood is serene and cultural.

## 目次

はじめに	3
I 文化財保護の体系	5
II 日本の文化財保護の歴史	7
III 無形の文化遺産の保護の体制	8
IV 日本の無形文化遺産	9
1 無形文化財	9
(1) 文化財保護法上の位置付け	
(2) 指定・選択	
(3) 無形文化財の保護のための施策	
(4) 重要無形文化財の例	
2 無形の民俗文化財	16
(1) 文化財保護法上の位置付け	
(2) 指定・選択	
(3) 無形の民俗文化財の保護のための施策	
(4) 重要無形民俗文化財の例	
3 文化財の保存技術	22
(1) 文化財保護法上の位置付け	
(2) 選定	
(3) 選定保存技術の保護のための施策	
(4) 選定保存技術の例	
V 国際的な無形遺産保護の取組と日本の無形遺産	25
まとめ	26

日本における  
無形の文化遺産の  
保護制度



## 我が国の歴史と風土から生まれた 多様な無形の文化遺産。


はじめに

我が国には多様な無形の文化遺産が伝承されている。それらは全国的に伝承されているものから、特定地域を中心に伝承されているものまで様々なものがあるが、いずれも我が国の歴史と風土の中で生まれ、育まれてきたものであり、日本の歴史や文化を知るうえで、また、人々のアイデンティティを確認するために大切なものである。そして、それらを伝承し、互いに尊重することは、将来の日本の文化を多様で豊かなものとするために、欠くことができないものの一つと言える。

日本では、現在、文化財保護法によって、これら無形の文化遺産を「無形文化財」「無形の民俗文化財」、また、文化財の保存に欠くことができない伝統的な技術・技能を「文化財の保存技術」に位置付け、それぞれ重要なもの、または保存すべきものを指定あるいは選定し、その伝承や公開等に支援を行っている。以下、これら無形文化財等について保護の体系や施策などの概要を紹介する。

「無形文化遺産の保護に関する条約」が平成15(2003)年秋にユネスコ総会で採択されるなど、世界的にも無形文化遺産の保護に対する気運は高まっている。世界各地には、その歴史や風土に応じて生まれ発展し、伝承されてきた貴重な無形の文化遺産がある。その伝承や振興のための有効な支援策については、それぞれの固有の特色や内容、現在の状況等に応じて個別に検討され実施される必要があると思われるが、その検討に当たって、半世紀以上にわたる経験を有する日本の保護制度の概要を示した本小冊子が、参考となれば幸いである。





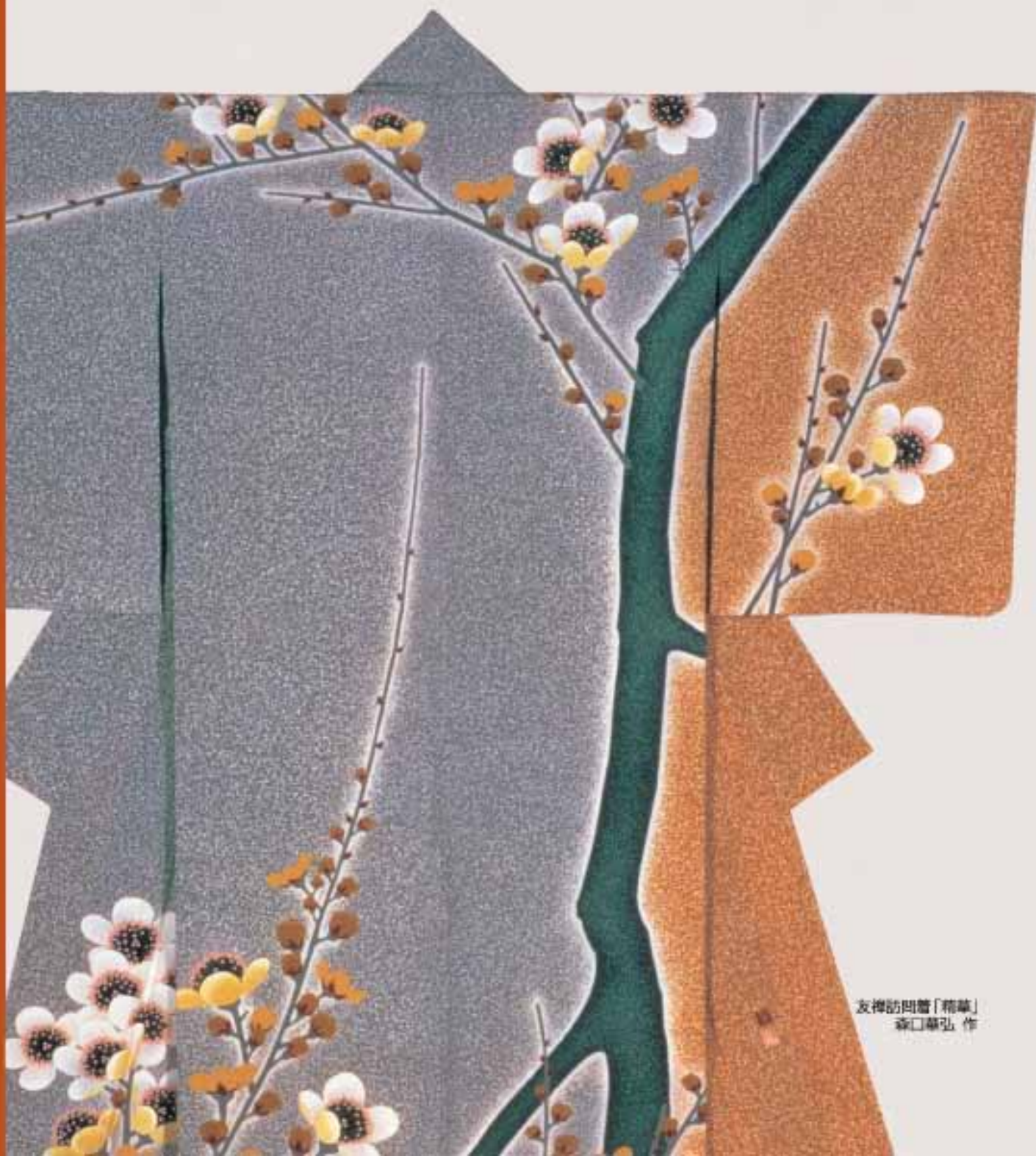
将来の日本の文化を多様で豊かなものとするために  
欠くことのできない  
無形の文化遺産の保護。

日本における  
無形の文化遺産の  
保護制度

## I 文化財保護の体系

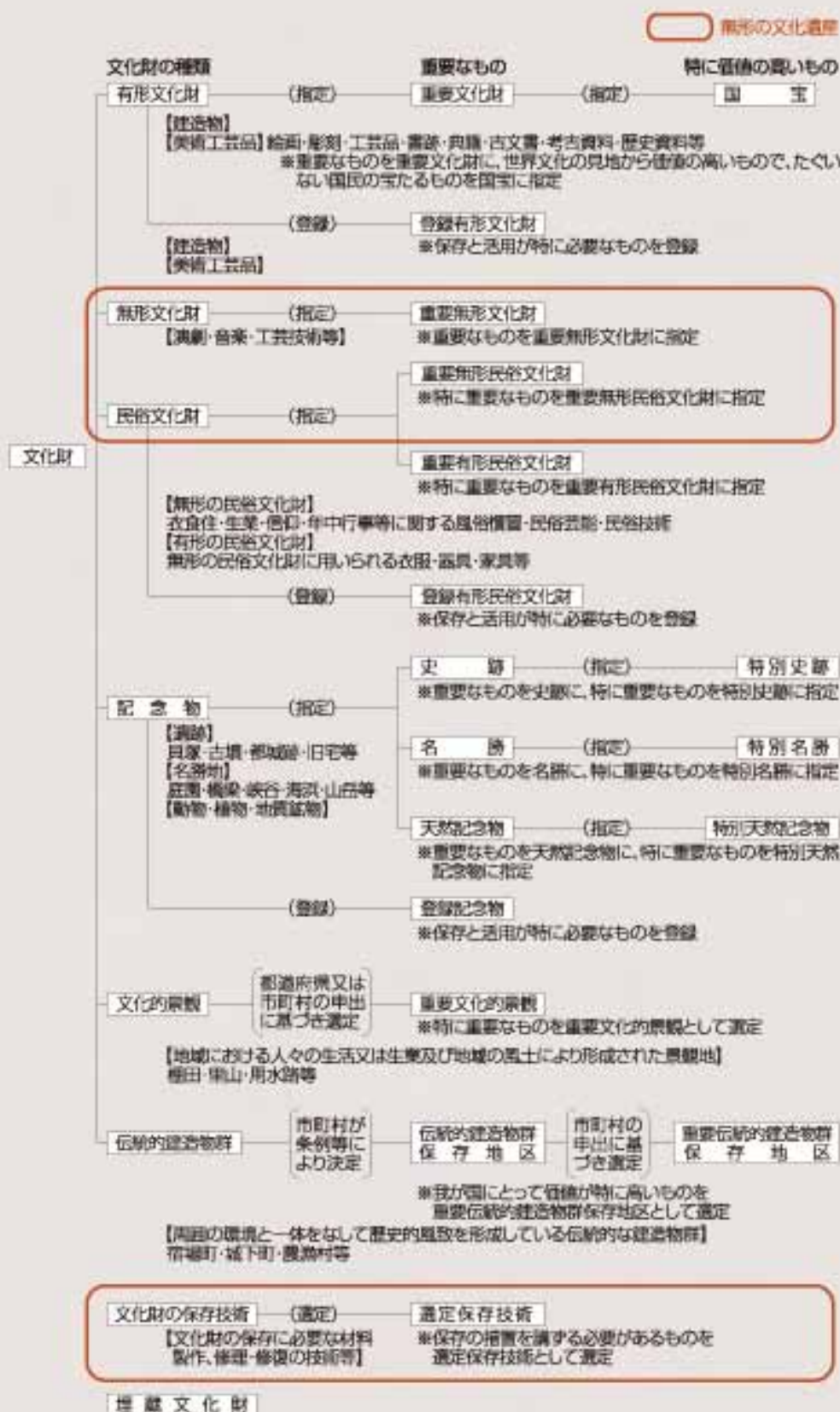
現在、我が国では「文化財」という言葉が一般化し、盛んに使われるようになっているが、我が国で文化財という言葉が、初めて法律上位置付けられたのは昭和25（1950）年に制定・施行された「文化財保護法」におい

てである。その後、文化財保護法は、数回の改正を経て現在の体系となり、現行法では、文化財を以下の6種類に定義づけ、さらに、別に文化財を保存する技術を加えて、それぞれ保護のために必要な措置を採っている。



友禪訪問書「精華」  
森口華弘 作







## Ⅱ 日本の文化財保護の歴史

日本の文化財の多くは、古くは公家、武家、社寺等によって保存されてきたが、明治維新によって社会の状況が大きく変化し、文化財は危機に直面した。そのため、明治政府は法整備を進め、「古社寺保存法」(明治30年)や「国宝保存法」(昭和4年)によって、有形文化財を対象に保護を行った。

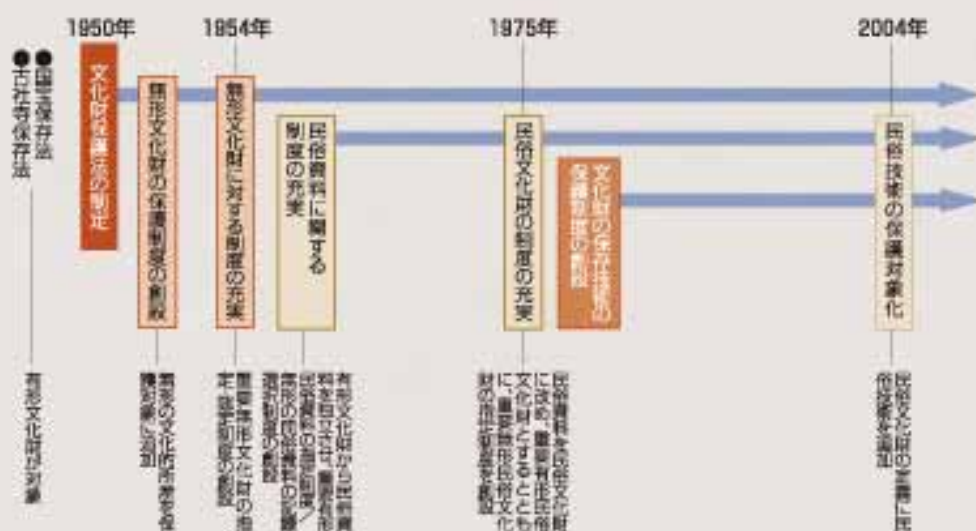
第2次世界大戦後の昭和24(1949)年に、我が国の代表的な古代建築である法隆寺金堂(奈良県)で火災が発生し貴重な壁画が焼損した。この事件を契機として、昭和25(1950)年に、新たに「文化財保護法」が制定された。このとき「無形文化財」が初めて法律上位置付けられたが、これは、とりわけ明治以降の西欧化・近代化により、日本の伝統的な芸能や工芸技術が衰亡の危機に瀕し、その保護の重要性が改めて認識されたためである。

制定当初の文化財保護法においては、無形文化財のうち特に価値の高いもので、国が保護しなければ衰亡するおそれのあるものへの助成を中心とした制度であったが、昭和29(1954)年に行われた同法の改正に

より、重要無形文化財の指定及び保持者の認定制度を定め、より積極的に保護の手を及ぼすこととした。指定制度による文化財の重点的保護は、有形・無形を通じた日本の文化財保護法の大きな特色と考えられる。同時に、有形の民俗資料の指定制度を独立させるとともに、無形の民俗資料についても記録作成による保存を行うこととした。

また、昭和50(1975)年の同法改正によって、それまでの「民俗資料」を「民俗文化財」に改め、「文化財の保存技術」を法律上位置付けた。民俗文化財のうち無形の民俗文化財は、その重要なものを指定して、より積極的な伝承を図ることとした。修理技術等の文化財の保存技術は、正確かつ正統であることを求められるという面が強く、芸術上の価値を重視する無形文化財と異なる視点で別にとらえ、積極的な伝承支援を行うこととして、それぞれ現在に至っている。

平成16(2004)年の同法改正によって、新たに民俗技術を民俗文化財の一分野として位置付け、従来の民俗文化財と同様の保護措置を講ずることとした。





## Ⅲ 無形の文化遺産の保護の体制

### 1 国による無形文化遺産の保護

我が国では、無形の文化遺産の保護のため、文化庁文化財部に芸能、工芸技術及び民俗文化財に関して専門的な識見を有する調査官を配置し、重要無形文化財・重要無形民俗文化財等の指定や助成の事務に当たっている。なお、指定については、文部科学大臣が文化審議会に諮問し、その答申を受けて行うこととなっている。

無形の文化遺産の保護の関係研究機関

として独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所に無形文化遺産部を設け、関係分野の研究及び記録の作成に当たっている。

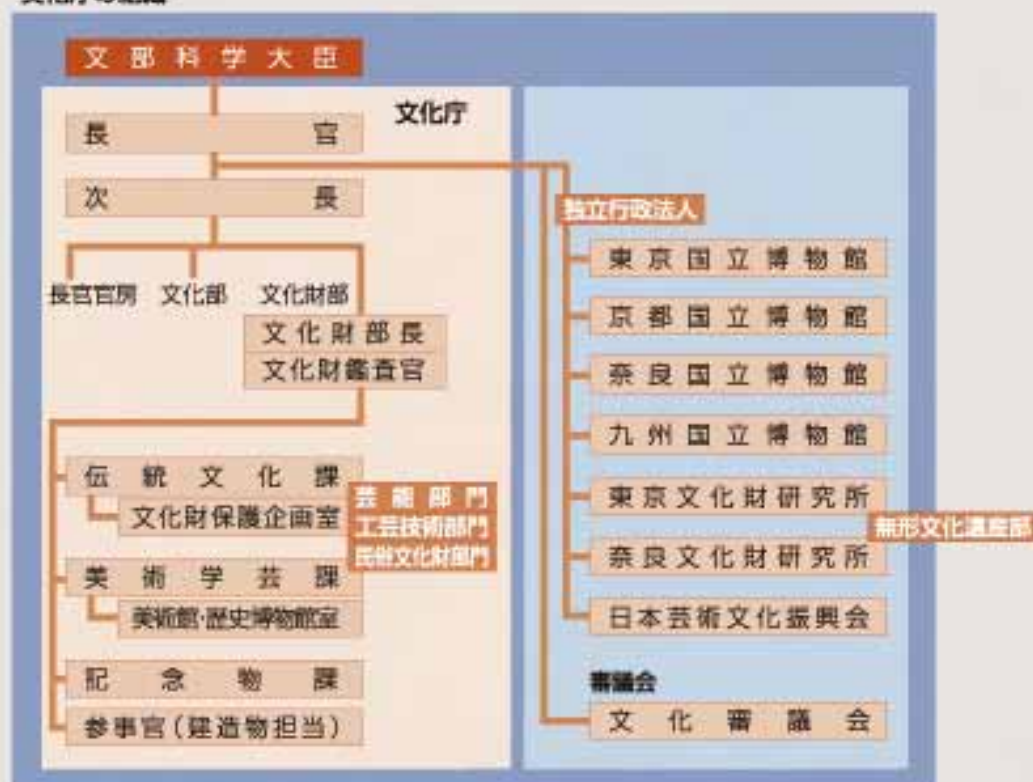
また、独立行政法人日本芸術文化振興会は国立劇場、国立演舞場、国立能楽堂、国立文楽劇場、国立劇場おきなわを設置・運営し、伝統芸能の公開、伝承者の養成、調査研究等を行っている。

### 2 地方における無形文化遺産の保護

文化財は各地域に所在するものであり、文化財保護行政は、国と地方公共団体が一体となって総合的に推進することが不可欠である。多くの地方公共団体は、その区域内に存する文化財で国指定以外のものの

保護を図るため、文化財保護条例を定め（平成13年5月1日現在、全国で約97%の地方自治体が文化財保護条例を制定）、それに基づいてその地方にとって価値ある文化財を指定し、保存と活用を図っている。

#### 文化庁の組織



## Ⅳ日本の無形文化遺産

前述したとおり、日本における無形文化遺産は、文化財保護法上の「無形文化財」、「無形の民俗文化財」、「文化財の保存技術」が

該当する。それぞれその特性に配慮し、以下のとおり保護を行っている。

### 1 無形文化財

#### (1) 文化財保護法上の位置付け

文化財保護法で「無形文化財」は、「演劇、音楽、工芸技術その他の無形の文化的財産で、我が国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの」と定義されている。この無形文化財という言葉は、有形文化財に対応する名称である。有形文化財が建造物、絵画、彫刻、工芸品などの「物」を指しているのに対し、

無形文化財は、芸能や工芸技術など、特定の個人や団体が伝承し体得している無形の「わざ」そのものを指している。つまり無形文化財は、人や作品を指すのではなく、人々の保持するわざや行為、動作などを指しているところに、具体の物をとらえる有形文化財との根本的な違いがある。

#### (2) 指定・選択

国は、このような無形文化財のうち重要なものを重要無形文化財に指定すると同時に、そのわざを高度に体現している人や集団を保持者又は保持団体に認定し、我が国の伝統的な技の継承を図っている。保持者及び保持団体の認定には「各個認定」、「総合認定」、「保

持団体認定」の3方式がとられている。なお、このように各個認定された個人の保持者が、一般には「人間国宝」と呼ばれるようになり、このなじみやすい呼称で、無形文化財の保護制度も、多くの人々に認識されていった。それぞれの認定の対象は下表のとおりである。

重要無形文化財保持者等の認定の対象

区 分		認 定 の 対 象
保 持 者	各 個 認 定	重要無形文化財に指定された芸能を高度に体現できる者または重要無形文化財に指定された工芸技術を高度に体得している者
	総 合 認 定	2人以上の者が一体となって芸能を高度に体現している場合や2人以上の者が共通の特色を有する工芸技術を高度に体得している場合において、これらの者が構成している団体の構成員
保 持 団 体	保持団体認定	技術の性格上個人的特色が薄く、かつ、当該技術を保持する者が多数いる場合において、これらの者が主たる構成員となっている団体

この3種類の認定手法は、保護すべきわざに応じた適切な支援策を講じるために工夫されたものであり、それぞれ以下のように適用されている。

各個認定は、重要な無形文化財を、それぞれ個別に指定し、その個々のわざごとに高度な体現・体得者を個別に保持者に認定するものである。



総合認定も保持者の認定であるが、これは実演家などを個々に認定するのではなく、複数の実演家達を総合的に認定するものである。つまり指定して保護を図ろうとする無形文化財が、例えば芸能の能楽や歌舞伎、人形浄瑠璃文楽などのように、演技や人形操作だけを行う実演家達、歌だけを担当する実演家達、楽器演奏だけを行う演奏家達など、2人以上の専門実演家達が、それぞれ個性を発揮し、一体となって活動して成立する場合に適用される。それぞれの技芸に関わる実演家達を、すべて認定するのではなく、多数の実演家達の中でも高度な技芸を保持している実演家達を認定する。そのように認定された保持者達は、それぞれの保持者達の団体の構成員になる。

保持団体認定は、例えば工芸技術の陶芸のなかで、陶土や釉薬を適切に準備する技術などのように、高度で熟練を要する技術であっても、個人的な特色を発揮する必要性が薄い技術を持つ多数の技術者達によって発揮されている場合に適用している。一人一人を保持者に認定するのではなく、そのような技術者達が中心になって構成している団体を保持団体として認定するものである。各保持団体について、その構成員の新規加入や退会は、各団体の自主的な判断を尊重している。

以上の3種類の認定手法を具体的に示すと、伝統芸能の一つである能楽は、演技技術である能シテ方や能ツキ方、狂言方と音楽の演奏技術である能囃子方笛、同小鼓、同大鼓、同太鼓によって成立し、かつそれぞれの実演家は、一つのわざを決めて専門に習得し発揮している。このような能楽を良好に将来に伝承するためには、個々のわざが適切

に伝承されるとともに、それらが一体となって発揮されている能楽が全体として適切に伝承される必要がある。そのため能シテ方など個々のわざの高度な体現者を各個認定するとともに、それぞれの役割の高度な実演家達が構成している団体の構成員達も、総合的に保持者に認定している。

また、以上のような重要無形文化財の指定と併せて、重要無形文化財に指定されていないが、我が国の芸能や工芸技術等の変遷の過程を知る上で貴重なもので、かつ記録の作成や公開等を行う必要がある無形文化財については「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」として選択し、国自ら記録作成をするとともに、地方公共団体や調査・記録作成を行うのに適した団体が行う記録作成や公開事業に対して助成を行うこととしている。

現在、重要無形文化財の指定及び保持者・保持団体の認定は、芸能分野と工芸技術分野で行っており、その現在の状況は次頁〔表1〕のとおりである。平成18(2006)年4月時点で83件の指定に対し114人の各個認定(人間国宝)、11件の指定に対し11団体の総合認定、14件の指定に対し14団体の保持団体認定が行われている。

また、「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に選択されたものは次頁〔表2〕のとおりである。選択件数は合計90件で、うち芸能は30件、工芸技術60件である。

なお、このような国の施策に準じて、各都道府県や市町村も、それぞれの行政区域内の無形文化財を指定しており、その合計は992件(平成15(2003)年)となり、各地方自治体は、それぞれの状況に応じて、その伝承等に支援している。

日本における  
無形の文化遺産の  
保護制度



〔表1〕重要無形文化財指定・認定状況

2006.4.1現在

分野	種別	保 持 者				保 持 団 体	
		各 個 認 定		総 合 認 定		指定件数	保持団体数
		指定件数	保持者数	指定件数	保持者の団体数		
芸能	雅楽	0件	0人	1件	1団体		
	能楽	7	12	1	1		
	文楽	3	5	1	1		
	歌舞伎	5	10	1	1		
	組踊	1	1	1	1		
	音楽	19	24	6	6		
	舞踊	1	3	0	0		
	演芸	2	2	0	0		
	小計	38	57	11	11		
工芸技術	陶芸	12件	12人			3件	3団体
	染織	13	16(15)※			7	7
	漆芸	5	7			1	1
	金工	7	10			0	0
	木竹工	2	6			0	0
	人形	2	2			0	0
	手漉和紙	3	3			3	3
	裁金	1	1			0	0
	小計	45	57(56)※			14	14
	合計	83件	114(113)※人	11件	11団体	14件	14団体

※( )は実数を示す。同一人が2分野で保持者に認定されている。

〔表2〕記録作成等の措置を講ずべき無形文化財選件数

2006.4.1現在

種 別 件 数			種 別 件 数		
芸能	能楽	1	工芸技術	陶芸	15
	歌舞伎	3		染織	14
	音楽	23		漆芸	7
	演芸	3		金工	10
	小計	30		木工	2
				人形	1
				手漉和紙	7
				裁金	1
				その他	3
				小計	60



## (3) 無形文化財の保護のための施策

- 各個人認定保持者に対し、自身の技芸・技術継承と伝承者養成のために、特別助成金(年額200万円)を交付。
- 保持団体や総合認定保持者の団体、地方公共団体等が行う伝承者養成、公開事業に対し、その経費の一部を助成。

## 【芸能分野】

- 国立劇場において、伝統芸能の公開、公演記録映像等の作成、関係資料の収集・公開、

能楽、文楽、歌舞伎、演芸等の後継者養成研修の実施。

## 【工芸技術分野】

- 重要無形文化財の技術の記録映画の製作。
- 保持者や保持団体が制作した作品を収集し、それを公開する事業として「『日本のわざと美』展—重要無形文化財とそれを支える人々—」を国内各地の美術館・博物館を会場として実施。

## (4) 重要無形文化財の例

重要無形文化財に指定された芸能と工芸技術の一端を紹介する。

## 〈芸能〉

## ① 雅楽

奈良時代(710~793年)前後に、中国や朝鮮などから、我が国に伝わった音楽や舞踊や、それらを元に日本で作られたもの、さらに、我が国古代の音楽。主として宮廷や寺社の行事で公演されてきた。



雅楽

## ② 能楽

室町時代(1392~1573年)に大成したもので、笛、小鼓などの伴奏音楽にのせ、非常に凝縮された動きで劇的な内容を表現する「能」と、こっけいなセリフ劇である「狂言」を含んでいる。



能楽

## ③ 人形浄瑠璃文楽

それ以前から行われていた人形芝居の伝統を継承して18世紀に大成したもので、三味線音楽の義太夫節にのせて、各登場人物の人形は、一体を3人で操り、精緻で精妙な表現を見せる。



人形浄瑠璃文楽

日本における  
無形文化遺産の  
保護制度



#### ④ 歌舞伎

江戸時代初期に始まり、それ以前の多様な芸能や音楽を積極的に取り込んでいる。女性役を男性が演じる独特の「女方」や様式化された所作、絵画的な舞台構成に特色があり、江戸時代に庶民の圧倒的な支持を受けた。



歌舞伎

#### ⑤ 組踊

18世紀初めに、沖縄の琉球王府が作り出したもので、日本や中国などの芸能を取り入れ、沖縄の伝統的な特色ある音楽にのせ、せりふと歌や踊りで筋を運ぶものである。



組踊

#### ⑥ 音楽

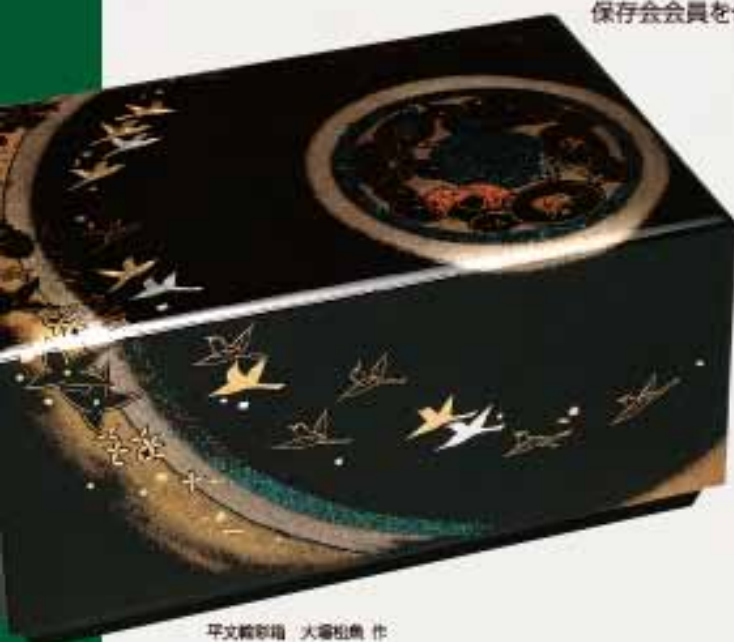
日本の伝統的な音楽のなかで、以下のようなものを各個認定している。「尺八」（竹の縦笛の演奏）、「箏曲」（箏と呼ばれる13弦の楽器や3弦の三味線の伴奏で歌う音楽）。多様な三味線音楽の中で「長唄唄」「長唄三味線」「長唄鳴物」「義太夫節浄瑠璃」「義太夫節三味線」などについて、歌い手の技法と三味線の演奏技法をそれぞれ別に指定している。さらに沖縄県地方の特色ある音楽として「琉球古典音楽」を指定している。また総合認定としては「義太夫節」「常磐津節」「一中節」などを指定し、それぞれ高度な技芸を持つ歌い手達と三味線演奏家達である各保存会会員を保持者に認定している。

#### ⑦ 舞踊

舞踊では各個認定として「歌舞伎舞踊」（歌舞伎の中で生まれ、後に独立して演じられるようになった舞踊の技法）を指定し、その高度な表現者を認定している。

#### ⑧ 演芸

演芸では各個認定として「古典落語」（江戸時代〔17～19世紀〕に成立した話芸。一人の実演家が複数の登場人物を語りわけ、一般の人々の日常的な生活や滑稽な内容の話を表現する）、「講談」（中世の語り物芸能の伝統を継承し、一人の実演家が歴史上の英雄談などを語るもの）を指定し、その高度な表現者を認定している。





## 〈工芸技術〉

## ① 陶芸

陶器や磁器、炻器を制作する技術。陶土や粘土を主原料とし、轆轤成形、たたら成型、手捻りなどで成形し、必要に応じて施釉した後、焼成して完成させる。日本各地に独特の素材や技術を生かして発展した、特色ある陶技が伝わる。

(指定例)

各個認定／「色絵磁器」、「彩繪磁器」、「白磁」、「青磁」、「鉄釉陶器」

保持団体認定／「柿右衛門(淺手)」、「色鍋島」、「小曲田焼」



青磁

## ② 染織

織機等を用いて生地・布地などを織る技術と、様々な染料を用いて染める技術など。我が国には、各地の風土を反映した様々な繊維素材と、それを生かした多様な染織技術が伝承されている。

(指定例)

各個認定／「有職織物」：奈良時代に中国から伝わり  
平安時代に日本風に大成

「羅」：極めて繊細な網目状の織物

「紬織」：素朴な印象の絹織物

「羅織」：多彩で複雑な絵模様を表現する織物

「友禅」：美しい多色の絵画的な染めが特色

「江戸小紋」：精妙な型紙で細かい模様を一色で染める

保持団体認定／「久留米絨」、「宮古上布」、「伊勢型紙」、「久米島紬」



羽織

## ③ 漆芸

漆の木から採取した漆液を精製して用いて、工芸品を制作する技術。漆そのものの美しさを生かした塗りの技法のほか、蒔絵、螺鈿、沈金などの多様な装飾技法がある。

(指定例)

各個認定／「蒔絵」：漆に金・銀粉などを蒔きつけて美しい模様を描く

「螺鈿」：美しい光沢を持つ貝殻をはめこむ

「沈金」：漆に文様を彫りくぼめ金箔などを埋める

保持団体認定／「輪島塗」



沈金

日本における  
無形文化遺産の  
保護制度

#### ④ 金工

金属を素材とし、その特質である熔解性や展延性を利用し、造形する技術。我が国では、金、銀、銅、錫、鉄の「五金」やそれらによる合金を用い、鍍金、鍛金、彫金を主とした技法を発展させてきた。

(指定例)

各個認定／「日本刀」、「刀剣研磨」:日本刀を製作する技術

「鍍金」:鍍型に熔解させた金属を流し込んで成形する技術

「茶の湯釜」:茶席で使用する茶釜を制作する技術

「彫金」:金属の素地を線刻や象嵌などで装飾する技術



彫金

#### ⑤ 木竹工

多彩で豊富な樹木や竹に恵まれた我が国の自然を反映した技術。

(指定例)

各個認定／「木工芸」:材木の特色と持味を活かした指物や装物

「竹工芸」:竹の素朴な美しさと弾力を生かし花籠などを制作する技法



竹工芸

#### ⑥ 人形

古くは玩具や宗教的な道具であったが、近世以降は鑑賞や愛玩を目的に制作されることが始まり、芸術的に洗練された。

(指定例)

各個認定／「衣裳人形」

「桐壺人形」:桐材等の木粉を固めた素材に衣裳を仕立てたもの。



桐壺人形

#### ⑦ 手漉和紙

古代から我が国で行われてきた伝統技術で、楮や雁皮などの樹皮の繊維を原料として紙を漉く。

(指定例)

各個認定／「越前率書」「土佐典具粘紙」「名塩雁皮紙」

保持団体認定／「細川紙」「本美濃紙」「石州半紙」



土佐典具粘紙



## ③ 鍍金

金・銀箔を細線や細片に切り、器物の表面に貼って優美な文様を構成する技法。飛鳥時代以来、仏像・仏画等の仏教美術を中心に発達をしたが、近年では工芸作品の装飾に活用されている。



鍍金

## 2 無形の民俗文化財

## (1) 文化財保護法上の位置付け

文化財保護法で、「民俗文化財」は、「衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗慣習、民俗芸能、民俗技術及びこれらに用いられる衣服、器具、家屋その他の物件で我が国民の生活の推移の理解のために欠くことのできないもの」と定義されている。このうち前段の「衣食住～年中行事等」に関する風俗慣習と民俗芸能、民俗技術で、我が国民の生活の推移の理解のために欠くことのできないもの」が、無形の民俗文化財で、以下の「これらに用いられる衣服～その他の物件」が、有形の民俗文化財である。国は、そのような民俗文化財の中で、国民生活の推移を理解するうえで特に重要なものの保護を図ることとしている。

従来、無形の民俗文化財のうち、基盤的な生活文化の特色を示す典型的な風俗慣習や、芸能の変遷の過程を示す民俗芸能などで

特に重要なものを、重要無形民俗文化財に指定し、その継承を図ってきたところである。

また、平成16年5月の文化財保護法改正によって民俗文化財の一分野に位置付けられた民俗技術も、今後、現行の民俗文化財と同様の保護措置を講ずることとしている。

なお、「民俗技術」は、日常生活において用いられてきた衣食住に関する技術（生活維持のための技術）や、生計を随うために用いられてきた生業に関する技術等を指している。これらは、無形の民俗文化財として保護の対象となるほか、これらの技術で使用された用具、施設等についても、

有形の民俗文化財として保護の対象となる。

## (2) 指定・選択

無形文化財では、わざの指定と保持者・保持団体の認定を同時に行っているが、無形の民俗文化財では指定のみを行うこととしている。これは無形の民俗文化財が、一般の人々の生活様式や慣習そのものであり、その伝承も生活に密着して行われているので、その伝承者を特定することが実状に合わない点が多いためである。例えば、地域の人々が伝承している年中行事や民俗芸能、民俗技術で、ある役割は子どもが行

う決まりがある場合、年齢に応じて毎年参加者が変化するなどである。ただし、当該重要無形民俗文化財の保護伝承活動を行っている団体を保護団体として特定し、その活動に対して必要に応じて補助を行っている。



日本における  
無形の文化遺産の  
保護制度



また、無形文化財と同様に、重要無形民俗文化財以外の無形の民俗文化財で重要なものを「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択し、国自ら記録作成するとともに、地方公共団体や調査・記録作成を行うのに適した団体が行う記録作成や公開事業に対して補助することとしている。

〔表3〕重要無形民俗文化財指定・選択件数

2006.4.1現在

分 野	種 別	重要無形民俗文化財	記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財
風俗慣習	①生産・生業	6	49
	②人生儀礼	6	15
	③娯楽・競技	6	13
	④社会生活(民俗知識)	2	13
	⑤年中行事	25	36
	⑥祭礼(信仰)	52	88
	小 計	97	214
民俗芸能	①神楽	28	58
	②田楽	24	41
	③風流	33	117
	④語り物・祝詞芸	5	8
	⑤延年・おこない	7	14
	⑥渡来芸・舞台芸	34	76
	⑦その他	15	32
	小 計	146	346
民俗技術		3	0
合 計		246	560

(3) 無形の民俗文化財の保護のための施策

- 重要無形民俗文化財の保護団体が行う後継者養成事業や現地公開事業さらに公開に欠くことができない施設の修理や用具等の新調・修理事業に対し、その経費の一部を補助している。
- 各地の重要無形民俗文化財が所在する地方公共団体が行う伝承・活用等事業(広く

現在、重要無形民俗文化財は246件、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財は560件である。これらの無形民俗文化財は、風俗慣習分野、民俗芸能分野、民俗技術分野において、各伝承の特色に応じて、以下〔表3〕のように整理することができる。

- 一般の理解を得るための解説パンフレットや解説ビデオ等の作成、一般の人々を対象にした体験的な伝承教室と成果の発表会、伝承内容を専門的な視点からとらえたビデオ等の記録作成事業)に対し、その経費の一部を補助している。
- 地方公共団体等が実施する個別の無形の



民俗文化財の調査事業に対し、その経費の一部を補助している。また国は、無形の民俗文化財に関する全国的な調査を企画し、各地方自治体に補助して実施している。さらに国は、必要に応じて各地の無形の民俗文化財の現状等について調査している。これらの調査事業の成果は、個々の無形の民俗文化財の貴重な記録になるとともに、その保存・継承施策を検討するための資料としても活用が図られている。

○都道府県が作成した地域の伝統的な伝承

の保存計画に基づき、それぞれの無形の民俗文化財等の保存会等が行う、用具等の修理・新調事業や記録作成事業について、国の経費で実施している。

○国内各地の民俗芸能を一堂に集めて公開する各種の民俗芸能大会事業を補助。

○海外から特色ある芸能を招聘し、国内の民俗芸能とともに公開し、その価値の一般への周知および相互の国際交流を図る「国際民俗芸能フェスティバル」を実施。

#### (4) 重要無形民俗文化財の例

重要無形民俗文化財の一端を紹介する。

##### 〈風俗慣習〉

##### ① 生産・生業

農耕や漁撈など日々の暮らしを支えてきた仕事や生産活動等に関わる習俗や行事。

(指定例)

##### ●「佐渡の車田植」(新潟県)

田の中心から円形に稲の苗を植えていく田植の習俗で、水田稲作農耕の古い形態を伝える。

##### ●「壬生の花田植」(広島県)

菅笠を被った早乙女と呼ばれる女性たちが、轆子に合わせて華やかに田植を行う。



壬生の花田植

##### ② 人生儀礼

誕生から死に至るまで、人の一生の間において段階的に行われる儀礼や行事。

(指定例)

##### ●「泉山の登拝行事」(青森県)

7歳から9歳までの男子が近くの山に登り、無事に成長することを祈願する。

##### ●「川俣の元服式」(栃木県)

ナツケ(名付け)とも呼ばれる儀礼で、男子が一人前となったことを地域が承認する。



泉山の登拝行事

日本における  
無形の文化遺産の  
保護制度

### ③ 娯楽・競技

日常生活の中で娯楽として伝承されてきた行事や  
勝敗によって吉凶等を占う行事。

(指定例)

●「刈野の大綱引き」(秋田県)

長さ50メートル以上ある二本の大綱を繋いで引  
き合い、その勝敗で豊作を占う。

●「但馬久谷の菰蒲綱引き」(兵庫県)

五月節供に行われる綱引きで、大人と子供の対抗で  
綱を引き合い、災厄を祓う。



上州白久保のお茶漬

### ④ 社会生活(民俗知識)

地域の社会的集団によって伝承されている行事  
や伝統的な生活の知恵による行事。

(指定例)

●「上州白久保のお茶漬」(群馬県)

地域の人々が集まって数種の茶を飲み比べ、茶  
の種類を言い当てる。



男鹿のナマハゲ

### ⑤ 年中行事

一年を単位として、毎年同じ季節や同じ日に繰  
り返し伝承されてきた行事。

(指定例)

●「男鹿のナマハゲ」(秋田県)

年の初めに恐ろしい面や褌装などをつけた異装  
の者が訪れて、人々を祝福する。

●「志摩加茂五郷の盆祭行事」(三重県)

盆の先祖供養の火祭りで、柱松と呼ばれる神聖な  
柱を立てて精霊を迎え送る。



京都祇園祭の山鉾行事

### ⑥ 祭礼(信仰)

山車や屋台の登場する神社の祭りや神仏に対する  
民間信仰に関わる行事や習俗。

(指定例)

●「京都祇園祭の山鉾行事」(京都府)。

日本各地の夏祭りに影響を与えた歴史ある祭りで、  
豪華絢爛な山や鉾が巡行する。

●「青森のねぶた」(青森県)

武者人形など歴史や神話を題材とした巨大な灯籠  
を作って勇壮に曳き回す。



### 〈民俗芸能〉

日本の各地で地域の人々によって伝承される民俗芸能は、その目的や内容などに応じて、おおよそ以下のように区分することができる。

#### ① 神楽

古代から始まり、豊作や無病息災など人々の多様な願いを含め、その場に神を招き、多様な舞踊などを行う芸能の総称。

(指定例)

●「大元神楽」(島根県)、「備中神楽」(岡山県)  
神を招く儀式的な舞やそれに応じて現れた神が日本の神話を演じる神楽。

「花祭」(愛知県)、「天龍村の霜月神楽」(長野県)  
神楽の場の中央に竈を構えて湯を沸かし、神を招く舞などを行った後に、その場に集まった人々やその土地を浄めるために竈の湯を周囲に振りかけることを中心にした神楽。

「早池峰神楽」(岩手県)、「伊勢太神楽」(三重県)  
神の化身としてあがめられる獅子を中心に行われる神楽。

#### ② 田楽

稲作農耕に関わる民俗芸能の総称で、豊作の祈りを込めて地域の人々が行ってきた芸能や平安末期から鎌倉期(12世紀)に職業芸能実演家達によって行われ大流行した芸能の姿を継承するものなどの総称。

(指定例)

●「三河の田楽」(愛知県)、「西濃の田楽」(静岡県)  
12世紀頃の芸能の様子を伝えるもの。

「板橋の田遊び」(東京都)、「藤守の田遊び」(静岡県)  
あらかじめ年間の稲作作業を歌や所作で演じ、稲作がその芸能と同じように順調に行われるようにとの祈りを込めて行われるもの。

●「住吉の御田植」(大阪府)

その年の豊年を祈願し、神社の田で、田植えと種々の芸能を行う。

●「安芸のはやし田」(広島県)

稲の生命力を唄と太鼓で喚起するために、地域の人々が太鼓を打ちながら囃し立てて田植えをする。



早池峰神楽



住吉の御田植



唐津くんちの曳山行事



日本における  
無形の文化遺産の  
保護制度



### ③ 風流

中世(12～16世紀)に流行した芸能の様子を伝えるもの。みやびやかなもの、風情あるものという意味で、派手に着飾って集団で踊る民俗芸能の総称。雨乞いや豊作祈願、先祖供養など種々の祈りを込めて演じる。(指定例)

#### ●「古弘楽」(福岡県)

踊り手が胸につけた太鼓を打ち鳴らしながら集団で踊る。

#### ●「白石踊」(岡山県)、「海宮の念仏踊」(香川県)、「新野の盆踊」(長野県)

先祖の霊を慰めるために、歌い手の歌に合わせて、大勢が輪になって踊る。

#### ●「チャッキラコ」(神奈川県)、「綾子舞」(新潟県)

中世に流行した踊りをうかがわせる。

#### ●「山比のお峰入り」(神奈川県)、「やすらい花」(京都府)

様々な扮装で踊ったり練り歩いたりする芸能。



チャッキラコ



### ④ 語り物・祝福芸

一連の物語を語る芸能や正月などに縁起の良い言葉を語りながら人々の幸福を祈る芸能の総称。古代の日本にあった、語られた言葉は現実になるという信仰が背景にある。

(指定例)

#### ●「題目立」(奈良県)、「幸若舞」(福岡県)

#### ●「越前万歳」(福井県)、「三河万歳」(愛知県)、「尾張万歳」(愛知県)

正月に家々を祝福してまわるもの。

### ⑤ 延年やおこない

平安時代末から鎌倉・室町期(12～15世紀)に、大寺院などで宗教行事とともに行われた盛大な芸能公演の姿を伝える芸能。

(指定例)

#### ●「毛越寺の延年」(岩手県)、「長滝の延年」(岐阜県)



## ⑥ 渡来芸・舞台芸

古代に中国などから我が国に渡来した種々の芸能や本来は舞台上で公演される能楽や人形芝居、歌舞伎などが、地域の民俗芸能として継承されるもの。

（指定例）

●「鬼来迎」（千葉県）、「大日堂舞楽」（秋田県）、「黒川能」（山形県）、「壬生狂言」（京都府）、「淡路人形浄瑠璃」（兵庫県）

## ⑦ その他

各種の芸能が次々と公開される総合的な伝承や、上記区分に整理できないもの。

（指定例）

●「多良間の豊年祭」（沖縄県）、「豊祭」（長野県）、「アイヌ古式舞踊」（北海道）、「伊江島の村譚」（沖縄県）



和船制作

## 〈民俗技術〉

伝統的な生業や衣食住など地域社会における生産活動や日常生活と結びついて伝承されてきた技術

（指定例）

●「津軽海峡及び周辺地域における和船製作技術」（津軽海峡及び周辺地域）

東北地方北部から北海道にかけての地域で使用された独特の木造漁船を作る技術。丸木船から構造船に至る過渡的な段階の和船製作の技術を伝えている。

## 3 文化財の保存技術

## (1) 文化財保護法上の位置付け

文化財保護法では、「文化財の保存のために欠くことのできない伝統的な技術又は技能で保存の措置を講ずる必要があるものを選定保存技術として選定することができる。」とされている。

我が国の美術工芸品や建造物など有形文化財のほとんどは、木、紙、漆等の比較的弱い材質で作られているため、定期的に適切な修理を重ねて今日まで保存されてきた。したがって、このような有形文化財を将来に継承するためには、定期的な修理を的確に

行える高度な技術者が必要である。さらに、修理のために資材や用具も必要なので、その用具・資材等の生産、製作、製造等の技術が必要である。

また、無形文化財である芸能においても、その伝承や公開のために楽器や衣裳、小道具の製作・修理技術が必要であり、同様に工芸技術では、作品を制作するための工具等の製作技術や、原材料の生産・製造等の技術は欠くことができないものである。



## (2) 選定

文化財を保存するために欠くことができない伝統的な技術や技能は、社会や経済の変化とともに、需要の減少や産業構造の変化、また、社会通念の変化などの理由によって、急速に失われていくおそれが高い。そのため、国では、特に保存の措置を講ずる必要がある技術・技能を選定し、同時に、その技術・技能を正しく体得し、かつ、これに精通してい

る個人を保持者に認定し、また、選定保存技術の保存を主たる目的とする団体で、保存のために適当な事業を行うことができる団体を保存団体に認定し、それらの技術・技能の継承を図っている。

現在、選定保存技術の選定・認定状況は以下〔表4〕のとおりである。

〔表4〕選定保存技術の選定及び保持者等の認定件数

2006.4.1現在

保持者		保存団体	
46件	50人	23件	24 (22) 団体

※保存団体には重複認定があり( )は実団体数である。

## (3) 選定保存技術の保護のための施策

- 保持者や保存団体等が行う技術継承や伝承者養成の事業、記録作成事業について、その経費の一部を補助している。
- 文化財を支える用具・原材料に関する調査を行い、その確保の方策について検討

(平成9年度～)。

- 広く一般に選定保存技術の重要性を周知し、後継者の養成等に資することを目的に、保存団体が一堂に会し、それぞれの技術内容を紹介する事業の実施。

## (4) 選定保存技術の例

### 有形文化財を支える技術

#### 「茅葺」

山茅やヨシなどを用いて建物の屋根を葺く技術。古来より、全国各地の民家から寺社建築まで様々な建物に使用され、現代まで受け継がれている。多様な技法が地方色豊かに発達し、継承されてきており、日本の農村景観を象徴する茅葺屋根の屋根葺き技術である。



茅葺



## 「表具用刷毛製作」

書画が表された絹や紙を裏打ち（裏面に紙や布などを貼って丈夫にすること）する際、また表装して仕立てる際に、手早く目つ均一に糊を塗布する上で欠くことの出来ない刷毛の製作技術。



表具用刷毛製作

## 無形文化財を支える技術

## 「雅楽管楽器製作修理」

重要無形文化財「雅楽」の上演に欠くことができない管楽器である笙（しょう）、篳篥（ひちりき）、横笛の竜笛（りゅうてき）や高麗笛（こまぶえ）、神楽笛（かぐらぶえ）の製作修理技術である。



雅楽管楽器製作修理

## 「日本産漆生産・精製」

日本の漆芸に欠くことの出来ない原材料の生産技術。漆の木を植栽し、成長した樹幹から漆液を採取し、精製する。



日本産漆生産・精製

日本における  
無形文化遺産の  
保護制度

## V 国際的な無形遺産保護の取組と 日本の無形遺産

平成15年のユネスコ総会において、無形文化遺産の保護に関し拘束力のある初めての国際的な法的枠組みとして「無形文化遺産の保護に関する条約」が採択され、平成18年4月20日に発効した。我が国は、平成16年6月、条約の早期発効を促すため、3番目の締約国となった。締約国は、自国の無形文化遺産保護に努めるとともに、国際的な枠組の中で、世界の無形文化遺産保護のために協力することが求められている。

平成18年6月27～29日、パリのユネスコ本部で第1回締約国総会が開催され、我が国は締約国の中から選出される政府間委員会の委員国となった。引き続き、政府間委員会において、条約執行のための指針の策定に参画していくこととなる。

条約の策定に先立ち、ユネスコは、人類の口承及び無形遺産の傑作を讃えるとともに、その継承と発展を図ることを目的として、平成13年度より、加盟国から提出される候補でユネスコの基準を満たすものを、隔年で、傑作として宣言してきた。

これまでに、我が国からは第1回目で「能楽」が、第2回目で「人形浄瑠璃文楽」が、第3回目で「歌舞伎（伝統的な演技演出様式によって上演される歌舞伎）」が傑作として宣言されている。なお、無形文化遺産保護条約の発効後は、それ以前に「人類の口承及び無形遺産に関する傑作」として宣言された無形文化遺産は、「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載される。



第3回傑作「歌舞伎（伝統的な演技演出様式によって上演される歌舞伎）」





まとめ

以上のように、我が国では、無形の文化遺産を文化財保護法によって「無形文化財」「無形の民俗文化財」「文化財の保存技術」に位置付け、それぞれ重要なものを指定あるいは選定して、その伝承事業等に補助し、継承を図ってきている。この無形文化財という言葉が法律に登場して半世紀以上が経過した。その間、国民の伝統文化への関心が高まってきているが、特に子どもたちに伝統文化への理解の浸透を図ることは、豊かな人間性を養う上でも有意義なことである。このため、学校教育においても、伝統文化についての授業を行ったり、音楽の授業に和楽器を取り入れるなどの取組を進めているところである。

無形の文化遺産をめぐるのは、産業構造の変化、価値観の多様化等による伝承基盤の弱体化や、国際交流への対応など、様々な課題が残されている。無形文化遺産保護条約が発効した後の世界的な取組への対応、我が国の果たすべき貢献も考えねばならない。今後とも、我が国では、無形の文化遺産のより適切な伝承を図るため、時代の変化に対応した適切な保護施策の在り方について、世界各地の事例も参考に、検討を重ねることとしている。



# Safeguarding of Intangible Cultural Heritage in Japan

■企画・編集：文化庁 ■制作：財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

文化庁／〒100-8959 東京都千代田区丸の内2-5-1 TEL 03-5253-4111

表紙：京都祇園祭の山鉾行事 裏表紙：海平枝垂桜文鉢 十四代源氏鶏太右衛門作